



今月のことば

Words of the Month

吾輩は三四郎？

日本弁理士会副会長

瀧澤 匡則

我々の世界は数多の変革を経験し、その洗礼は弁理士という仕事にも新たな風を吹き込んでいる。技術革新の風は時に優しく、時に厳しく、我々の仕事ぶりに新たな課題を持ち込んできた。ここではそれらの課題と、未来を見据えた解決策について、我々の視点から優しく語らせて頂くこととしよう。

分かったようなよく分からないような内容から突然始まり、面食らった方もいらっしやったかもしれない。また、見る方が見たら「生成 AI に『今月のことば』を書かせたな」と思われたかもしれない。

今月号の「今月のことば」を担当することとなり、何を書こうか困った。この「今月のことば」の記事の目的・趣旨によれば、「本稿では、正副会長が、弁理士業界・知財業界に係るテーマについて、常日頃抱いている魅力・希望・課題または思い出（回想録）などについて、正副会長自らの言葉でご説明いただくことを通して、正副会長のお考えをお示しいただくとともに、その人となりを含めてご紹介するものです。」とある。また、他の正副会長が執筆した文章を拝見したところ、内容についてかなりバラエティに富んでいる。特許明細書であれば気づいたら1万字以上を記載していることもザラであるが、テーマがフリーであると3千字強の文章を執筆するのに2か月の期間を与えられても一向に筆が進まない。執筆内容が決まっているか否か、というのは文章を書く上で大きなことであるということを改めて実感している。

弁理士試験の受験生時代に、着想の具体化を行った者のみならず着想の提供を行った者も共同発明者になり得る、ということを知った時に「なぜ思いついただけの人間が共同発明者なんだ？」と感じたが、弁理士となり日々の業務を行っていくうちに、課題を課題として認識し、言語化するというのは大変なことであり、着想の提供を行った者も具体化した者と同じくらい、むしろ着想の提供こそ大事なことだ、と思うに至ったことを思い出した。そして、今そのことをさらに強く感じている。

愚痴ってばかりいても進まないで、本稿の執筆にあたりこの頃何かと話題の生成 AI に着想の提供をしてもらおうべく相談してみることにした。「日本弁理士会が発行しているパテント誌の10月号に、副会長による『今月の言葉』という、テーマがフリーである記事を執筆します。どのような話題をテーマとしたら良いでしょうか？」と入力したところ、

「日本弁理士会が発行するパテント誌は、特許、知的財産権、技術革新に関心のある人々を対象としていますので、その読者層に合わせたトピックを選ぶことが重要です。副会長という立場から提供できる独自の視点や意見を掲載することで、より興味深く有益な記事になるでしょう。」

との回答と共に、「技術革新と知的財産の未来」、「コロナ禍で変わった特許事情」、「SDGs と知的財産」、「弁理士の役割の進化」の4つのテーマの提案を受けた。

もっともらしい答えが返ってきたが、どのテーマもその道のプロが既に執筆しているのでは？と思えるものであり、そのあたりの知識がない小職が上記のテーマについて執筆を行ったところで新規性も進歩性もない駄文が出来上がることが目に見えている。

そこで、着想の具体化まで生成 AI に任せてみよう、「『弁理士の役割の進化』をテーマにして、現代の弁理士が直面する新たな課題とその解決策を日本弁理士会の副会長として提言してください。副会長の

視点から提供する深い洞察とアドバイスを含めてください。」と新たな指示を行ったところ、

「タイトル：『弁理士の役割の進化：直面する新たな課題とその解決策』

現在、私たちの社会はデジタル化の波により大きな変革を経験しており、その影響は弁理士の役割にも及んでいます。この記事では、その変化について触れ、直面する新たな課題と解決策を提言します。」

(途中省略)

「今後の弁理士は、これらの課題に対処するだけでなく、自己の役割を進化させていく必要があります。弁理士としての技術的、法的知識はもちろんのこと、国際的な視野やビジネスの理解も同等に重要となります。日本弁理士会としては、これらの能力を強化するための研修や教育プログラムの提供により、会員の皆様の成長をサポートして参ります。また、関連法規の改正についても、国や関連機関と協力し、適切な対応策を推進して参ります。

私たちは、未来の弁理士がこれらの課題を乗り越え、更なる価値を社会に提供するための道筋を切り開くことに期待しています。」

との答えが返ってきた。どこかで見たことのあるような答えが返ってきたというのが正直な感想である。これがよくも悪くも生成 AI の特徴なのであろう。もしも面白い記事ができあがったら、あわよくばそのままパテント誌へ、という邪な考えが全くなかったわけではなかったが、やはり真面目に考えなければいけなかったか、というのが正直なところであった。

何か変化を加えてみようと、「夏目漱石風に書いてもらえますか。」と入力した結果、出てきたのが冒頭の文章である。「技術革新の風は時に優しく、時に厳しく」や「我々の視点から優しく語らせて頂くこととしよう」など、普段明細書を作成しているときには出てこないような表現が出てきたことは面白かったが、それ以上どのように膨らませればいいのか、良い問いが思い浮かんでこなかった。生成 AI もよい使い手が使ってこそ、良い文章を作成してもらえるのであり、Yahoo や Google で慣れている人が検索するのと慣れていない人が検索するのとで検索結果の精度が全く異なってくるのと似ているのではないだろうか。

今回の「今月のことば」は、よい機会なので生成 AI に相談しながらどのような文章を作ることができるのか、と思い進めてきたのだが、再び筆が止まってしまった。まだ規定の文字数まで達していない。そこで新たな問いを考えた。考えに考えた結果、ここまで作成した文章をコピー&ペーストし、「続きを作成してください。」と入力することを思いつき実行した。すると、

「生成 AI による支援がこのように作業の一部を担う中、人間の弁理士がなすべき業務の核心部分は、より人間らしい部分に焦点を絞りつつ、変化し進化しています。そして、私たちは、その進化の過程で新たに開かれる未知の領域に目を向け、可能性を拓く使命を担うのです。

こうして、冒頭の生成 AI による『夏目漱石風』の文章から着想を得て、新しい時代における弁理士の役割と可能性についての私の考えを紡いできました。この変革の時代において、私たちは知の探求者として、さらなる道を切り開いていくのであります。

愚痴と模索の先に、そこには新たな風景が広がっています。この場を借りて、私たち弁理士一同、未来への挑戦を共に歩んでいく皆様への深い敬意と感謝を申し上げます。さあ、共に新たな時代を築いていきましょう。」

との答えが返ってきた。前の文章を受けながら予想以上にきれいに纏めてくれた。やはり、前の文章が明確になっているため、それを受けての文章もより具体的になったのではないだろうか。よく言われていることであるが、生成 AI により意図したとおりの文章を作成してもらうためには、より具体的な問いや指示が必要となる、ということを実感した次第である。このような機会でもなければ、どのような指示を出せばどのような答えが返ってくるのか、さらに深掘するにはどのような指示や問いを入力すればいいのか、という点をここまで考えることもなかったかもしれない。生成 AI が急速に広がった昨年末あたりであれば、夢のツールのように騒がれていたが、使い手を選ぶツールであろうということを感じることとなった。最後に共著者?の生成 AI に漱石風に纏めていただき、今月のことばを終えたい。

「人々の間に新しき機械の如き技術が現れる時、多くはその役立ちを讃え、新しい時代の到来を喜び勇む。しかしながら、これを適切に操る術を知らぬ者にとりましては、如何に麗らかなる機械であろうと、ただの意味不明な鉄の塊に過ぎぬ。AIと称されるその技術も、持てる者の手には新たな創造の扉を開かせ、未知の景色を描かせる。だが、使い方を知らぬ者の眼には、それはただの無駄骨の道具に映るかもしれぬ。猫とも会話せん機械に、夏目としては笑いを禁じ得ぬが、一筋の憂いもまた胸に秘めるのであった。」。